

公民館における連続講座コーディネート

浮穴 正博

要約

公民館で実施する講座において「同一講師による連続講座」は、社会教育の目的である仲間の獲得と受講後の学習活動の継続（組織化）のためには、きわめて有効である。そこで本稿では、その企画と具体的な展開の方法について論ずる。さらに、特定のテーマ（本稿の場合は「女性学」）に視点を当てて活動を継続することで、学習が深まり、人と人のつながりが広がること、つまり「継続は力なり」を体感した事例を紹介する。また、あくまでも私見ではあるが「社会教育」と最近流行の「生涯学習」の違いについても言及してみる。

一 はじめに

通算一八年余りの公民館生活でさまざまな仕事を体験してきたが、春期と秋期の定期講座では、私は「同一講師による連続講座」というものにずっとこだわり続けてきた。本稿のねらいも、たぶんそこにあるだろうと思うので、私の経験と、それによって感じた思いを率直に綴

ろうと思う。

だからといって、同一講師による連続講座が、日替わりで専門分野の講師を選定して実施する講座よりすぐれていると私が考えているわけではないことを、あらかじめおことわりしておく。

大切なことは、講座の形状ではなく、目的達成のためにはどういうふう企画するのが効果的であるのかを考え、臨機応変に実施することなのだから。

二 公民館で

一九七二年四月、私は社会教育の「し」も知らぬくせに、なぜか社会教育主事（補）として大阪府富田林市に採用され、富田林市立公民館に配属された。

前任者から引き継いだ「婦人学級」地方自治と私たちという一〇回連続講座のカリキュラムを見せられて、「へ、こんなこと、せなあかんのか」と、頭の中が真っ白になった記憶は、今も鮮明である。なぜなら、私も当時は「公民館というのは部屋を貸すのが仕事」だと思っ込んでいたからである。

新米の社会教育主事（補）である私に与えられた仕事は（今から思えばけっこう盛りだくさんのだが）、たしか「社会同和教育」「青年学級」「婦人学級」「家庭教育学級」であったと記憶している。すでに組み立てられていた「婦人学級」の一〇回を事務的にこなしながら、自分の意思で意欲的に企画したものでなかったことも手伝っていたのだらう、私は「これではおもしろくない」と思っていた。

毎回講師が日替わりでやってくるという講座は、一回一回がブツ切れで、まさに「ご用とお急ぎでない」人び

とが自分の（ためだけの）「教養」を高めるために受講するといふもので、内容は講師からのメッセージの一方通行だった。たぶん私は、「これでは学習は深まらないし、広がらない」と感じていたのだらう。

当時の記録を見ると、同じ年（一九七二年）の秋、すでに私は、一〇回の「婦人学級」を一人の講師で通すということをやっている。

もちろん、講座によってはそうはいかない場合もある。内容によっては個別に専門的な講師を選定して組み立てる方が効果的である場合もある。だが、一人の講師で長期の講座を組み立てるといふことの有効性は、そのときにすでに実感していたし、以後の私の講座企画と運営の基本的なスタイルになったことは間違いない。しかも、講師依頼が一度ですむのだから、ありがたいこと、この上ない。

翌年の一九七三年度から一九七五年度にかけては、通年で連続二〇回以上、三〇回以上の同一講師による「家庭教育学級」を主催した。

同時に、「社会同和教育」や「青年学級」では日替わり講師の講座もいくつも並行してやってはいたが、学習の深まりと広がりという面から考えると、前者の方がはるかに効果的であるように私には思われた。

連続講座の利点は、受講生にとって信頼できる友人(仲間)ができると同時に、学習(活動)を継続させやすいということに尽きるのだろうが、それを同一の講師で通すと、質問や問題を次回以降に持ち越して解決することができるといふメリットがある。また、回を追うごとに私的な質問や相談をすることができるようになるまでに学習と人間関係が深まるだけでなく、運営の仕方によつては最終的には講師までが仲間になりうるのである。それは、講座終了後も学習を継続させようとするときのなによりも素晴らしい財産となる。

そんな公民館での生活を送って、なんとか社会教育の「しゃ」程度までわかったかな、という一九七五年一月、私は人事異動で解放会館(現「人権文化センター」)に配属となり、そこで一五年余を過ごすことになる。

三 再び公民館で

一九九一年四月、富田林市立中央公民館に異動になった。

古い木造で、使える部屋が三つしかなく、夏には蚊取り線香と扇風機が欠かせない、雨漏りし放題だったかつての公民館は、鉄筋二階建てで冷暖房付き、トイレも水

洗で、しかも男性用と女性用がそれぞれ独立した「中央」公民館になっていた。

当時、公民館で講座を担当する職員にとつては、だいたい(なんの根拠も拘束力もないのだが)春期和秋期には各一〇回程度の連続講座を主催することが暗黙のノルマになっていた。

異動した初年度は、とりあえず新米のころと同じように、前任者がつくつていた企画をこなすしかなかった。

公民館に帰ってきて、初めて同一講師で一〇回の連続講座を主催したのは、翌一九九二年の春期講座「文章教室」戦争体験と平和をつづる」というものであった。この講座では、私が毎回発行していた「教室だより」で「識字学級」のことや作品の紹介をするなどの工夫をしてみた。

ここで、翌一九九三年の秋期に企画した「迷信・偏見・そして科学」という講座のカリキュラムを紹介する。もちろん同一講師による連続一〇回講座である。

講師に選んだのは、「部落解放研究所」(当時)の『研究所通信』に掲載されていた講演記録を読んで、ぜひ呼んでみたいと思っていた関西大学教授のNOさんであった。

——「迷信は 人を幸せにするか 偏見は 人を 豊か

にするか 今 そこに 科学の光が あてられる」
というコピーを考えて、NOさんと相談しながらつくった一〇回は以下のとおりである。

- ① 「迷信のさまざま／迷信の性質」 〈茶柱が立つと良いことがある？〉
 - ② 「迷信と科学」 〈生活の知恵としての迷信と科学〉
 - ③ 「迷信と心①／迷信のしくみ1」 〈歩けば月が自分についてくる〉
 - ④ 「迷信と心②／迷信のしくみ2」 〈因果関係と宗教的な「因果応報」〉
 - ⑤ 「迷信と社会・文化／迷信のしくみ3」 〈社会的作用と文化的な伝統の力〉
 - ⑥ 「迷信と偏見」 〈「血液型」で性格診断ができる？〉
 - ⑦ 「偏見と心／偏見のしくみ1」 〈偏見に陥り易い権威の人格〉
 - ⑧ 「偏見と社会／偏見のしくみ2」 〈集团的・経済的・地域的偏見など〉
 - ⑨ 「偏見はいかにつくられるか」 〈偏見の形成過程を具体的に説明〉
 - ⑩ 「まとめ／迷信と偏見と科学的態度」 〈賢く付き合っ
て心豊かな生活を〉
- この講座は、NOさんにいわせると、大学の半期分の

講義に十分匹敵する内容だったそうで、たしかにかなり高度な内容であったが、四〇人近い受講生はほとんど脱落することもなく一〇回を修了した。

さらに、一〇回を通して特別参加したNOさんの研究室の大学院生が二人いて、受講生をはじめとする何人かの市民が、講座が終わってからもしばらく彼らの研究資料となるアンケート調査に協力していた姿も印象的だった。これも、同一講師による連続講座の利点である「学習の広がり（相互作用）」の一例といえるのではないだろうか。

ここで、一九九六年の秋期に実施した「女性学講座」やがて あなたも おばあちゃん」を素材として、連続講座の企画から実施に至るまでの経緯をたどってみる。

四 「やがて あなたも おばあちゃん」

1 企画

人によってさまざまであろうが、私の場合、春期講座の企画をたてるときは、前年の秋、遅くとも初冬にはメモを作りだす。早ければ早いほど資料集めや打ち合わせに時間的余裕ができるからである。

一月下旬から二月の上旬には春の企画を仕上げてください。ここで紹介する「やがてあなたもおばあちゃん」は秋期講座であるが、春期の企画ができあがった直後の一月下旬からスタートしている。もっともスタートといっても最初は「秋のテーマはどうしよう」と頭をひねって考え悩むだけのことなのだが。

かねてから関心のあった「女性問題」と、すでに大きな社会問題になっていた「高齢社会問題」を合体させてみようと考えついたのが二月中旬である。

いうまでもなく、社会教育に携わる職員といっても決してオールマイティではない。個々の専門分野については素人であるのだから、内容や構成、講師の選定などについて専門施設や専門家、あるいは図書館をはじめ新聞、雑誌、友人・知人・先輩・後輩やその紹介など、思いつく限りの社会資源を利用することを躊躇してはならない。それは最低限必要な努力である。そういう営みの末に、実際にはそのうちの一つが当たればいいのである。この事例の場合は「友人」であった。

さて、テーマは決めたものの高齢福祉についてはまったくの素人であるから、二〇年以上高齢者施設で働く友人を利用することを思いついた。

具体的な作業は、その友人に「イッパイ飲ましたるか

ら、あなたの二〇数年の総括をして、課題とキーワードをファクスしてくれ」と頼むことからはじまった。

その友人からは二月下旬にA4で五枚ものファクスが届いた。ここまでくれば企画の半分はできたも同然である。後はそのファクスとにらめっこしながら「老人ホームは八割以上が女性」「家族愛信仰」「介護は女の仕事?」「にどわらし」「高齢者問題は女性問題」など一〇ばかりの覚え書きを作って、またまた頭をひねるのである。

ただ、なぜかタイトルだけは早々と「やがてあなたもおばあちゃん」に決めていた。酒の勢いで考えたとはいえ、これだけはなぜか気に入っていて、だれがなんといおうと妥協しないつもりだった。

講座のタイトルというのは、真つ先に住民の目に触れる、いわばその企画の顔になるわけであるから、けっして軽々しく考えてはならない。ためしにいろんな社会教育施設の資料を探してみただければ、遊び半分のように思えるものも含めて、「エッ!」と思うほど工夫され考え抜かれたタイトルがたくさんあることがおわかりいただけると思う。こんな作業も社会教育の楽しいところかな、と私は考えている。ちなみに、最近目にした最高傑作は、たぶん団塊の世代を夫にしている女性対象の講座で「大変だ! 亭主元気で家にいる」というものだ。

2 講師

経験上もとても大切だと思ふことは、たとえ素人といえども、間違いがあっても勘違いがあってもいいから、素人なりの「企画案」（趣旨目的、講師をはじめ曜日、時間帯、対象などを定めたもの）と「カリキュラム案」（わからなければ、最初は単に覚え書きやキーワードを組み合わせただけのものでもよい）を作ってみることである。もちろんキチツとしたものができればいいことはないが、どこでワークシヨップを取り入れようかとか、話し合いの時間を何回目にとってよいかとか、どこかで手作業を入れた方が飽きがないだろうとか、後は講師との相談も可能なのである。そのためにも早めの準備が必要なのだ。

間違っても、講師との折衝の際に「素人やから、よーわかりまへんねん。センセにまかしまつさ」といったり、そういう気配を感じさせてはならない。講師を依頼しようとする相手にはウソでもこちらの「やる気」を感じさせる必要がある。そうであるかないかによって、以後の交渉の進展や、ひいては講座の成否にもかわってくるものだ。私自身も経験済みのことだが、講師と意気投合すれば講師謝礼も安く抑えられるかもしれないのだ。

しかも、この講座のように週一回、一〇回連続一人の講師（コーディネーター）で通すとすると、足かけ三〜四カ月の付き合いになる。だからこそ、とくに初対面の講師とはできるだけ直接面談して企画の意図を正確に伝え、感触を確かめなければならない。もし十分な下調べをせずに講師を選定して、それがミスキャストであった場合は、主催者にとっても受講生にとってもその三〜四カ月は最悪の月日になるだろう。結婚や就職の際の「身元調べ」はよくないが、依頼しようとしている講師の評判を調べたり論文を読むなど、講師選定の際の「身元調べ」は絶対に必要なのである。見も知らぬ人に電話一本で「××からご紹介いただきました（××で拝見しました）・お願いします・おまかせします・ハイー丁あがり」というケースを見聞きすることもあるが、これでは主催者にとってもただ事業と予算を消化しているだけでなんの達成感も得られないだろう。なによりも受講生に失礼だ。もちろん「継続性」も期待できない（主催者のそんな無責任な依頼を気楽に受ける方もどうかと思うが）。やむを得ず面談できない場合でも電話やファックスのやりとり（今ではメールという手段も一般的になっている）で主催者側の意図を伝え、講師との意思疎通をはかっておくことは不可欠である。

3 交渉

さて、講師はかねてから名前だけは知っていた「高齢社会をよくする女性の会・大阪」に打診することにした。六月初旬には同会のNAさんらと会い、内容や実施方法などを相談している。そのときに、悪戦苦闘して作った素人案を持って行ったのはいうまでもない。

以後、NAさんを窓口にして電話とファクスでキャッチボールし、①「個人ではなく会に依頼する」②「テーマ毎の各専門分野の講師をNAさんが選定してその都度招く」③「NAさんはコーディネーターとして毎回参加する」(つまり、この講座の場合は日替わり講師でありながら、NAさんがコーディネーターとして通して同席するという形であった)④「何人来てもらっても金額は一律」などを決めた。特に④はこれまでに例がなく大冒険だと思ったが、快く引き受けていただくことができた。これこそキャッチボールをくりかえしてできた「講師と主催者の信頼関係」のたまものであったといえるだろう。

七月にNAさんから最終のファクスが届き、プログラムが決まった。

女性学講座「やがてあなたもおばあちゃん」は、
——「結婚時の年齢差、平均年齢の男女差などを考える

と、女性は、晩年、平均一七〇八年のシングルライフを過ごすことになるそうです。また、『介護は女の仕事』という社会通念も根強く生きています。『高齢化問題は女性問題』と言われる所以です。高齢化は誰もが通る道。今から真剣に考えておかなければ……」
という呼びかけでようやく日の目を見ることになった。

各回の内容は次のとおりである。

- ① 「ようこそ長寿社会へ」
- ② 「知っていますか あなたの町を」
- ③ 「自分の老いをイメージしてみる」
- ④ 「高齢者問題はなぜ女性問題なのか——1——」
- ⑤ 「高齢者問題はなぜ女性問題なのか——2——」
- ⑥ 「介護〜日本と諸外国の現状を知る」
- ⑦ 「介護〜市町村のゴールドプラン」
- ⑧ 「高齢者の身体的・精神的変化と対応」
- ⑨ 「今 準備しておくこと」
- ⑩ 「したたかに長寿社会への助走を」

4 運営

「公民館だより」秋期講座募集号も市内に全戸配布されて募集を開始し、定員三〇人のところに三二人の応募

があった。ただ「やがてあなたもおばあちゃん」というタイトルなのに「すでにあなたはおばあちゃん」という人の応募が多かったのが不思議だったのだが。

年齢制限を設けたわけではないからもちろん全員合格である。講義中心の講座なら少々の定員オーバーは杓子定規に抽選などする必要はないだろう。

開催中、担当者は講師まかせで放っておくのではなく、できるだけ受講生と席を共にして内容と雰囲気を把握しておきたいものである。もしかししたら開講している途中で人間関係の微調整をしなければならなくなったり、講師と相談して講座の再構成を考えることも必要になるかもしれないからだ。そんな軌道修正ができるのも「同一講師による連続講座」の利点ではないだろうか。私の場合、先にも少し述べたように連続講座では毎回「教室だより」と称して、そのときどきの講座のまとめや私個人の雑感、運営上気づいたことなどがあればそれも書いて配布していた。

もちろん、欠席者への配慮もできるだけ細やかで丁寧でありたい。

5 終了後

一二月に講座は無事終了した。

次のステップは高齢問題を考える自主的なサークルへの移行（発展）である。NAさんと私の間での打ち合わせで、七〜八回目あたりから自主的な学習サークルへ発展させるように講義内容や配付資料や「教室だより」で意識的に働きかけた。グループでの話し合いでは自然に各人のリーダーとしての資質の有無がわかり、それが全体の共通認識にもなる。ここまでくればしめたもので、最終的にはNAさんの見事なコーディネーターのおかげで、「安心して老いることのできるまちづくり」をめざす学習と活動を進めるためのサークルが誕生した。

6 継続性

この講座が終わってしばらくして「介護保険」が大きな話題になりだした。富田林の中央公民館が「高齢社会をよくする女性の会・大阪」とNAさんの全面的な協力によって、比較的早く「介護保険」問題を取り上げ、たいした苦勞もなしに一〇回以上に及ぶ学習会を実施できたのは、この「やがてあなたもおばあちゃん」の経験があったことと、NAさんらとの関係が良好であったためであろう。先に述べた「継続性」とはこういうことである。

7 企画への入り口

いわゆる「現代的課題」といわれるテーマを企画するためには、日頃から社会的な関心を持っておくことが必要である。とくに人権問題として真正面からとりあげるべきなどは、書物や冊子などによって基礎的な知識を前もって学習し、問題意識を形成しておかなければならないことはいうまでもない。

人それぞれだろうが、「同和問題」や「女性問題」、「在日外国人問題」、「高齢者問題」、その他「環境」「福祉」「情報化」など、自分なりのこだわりを大切に、その視点から事業を展開するのも有効な方法であろう。

さらに、一口に「社会教育の職員」といっても、子どもが大好きで、子ども対象の企画をたてるのが得意であったり、高齢者の相手をするのが上手であったり、話し上手や聞き上手などさまざまな個性がある。イベントの企画に秀でているという職員もいるだろう。仕事をより楽しく進めるためにはそんな特性を生かすのもいいだろう。人事異動で初めて社会教育現場に移ってきて右も左もわからないという人は、とりあえず前任までの部署で培ってきた専門性や経験、人脈を足がかりにテーマを考えてみるのもいいかもしれない。

たとえば「料理教室」ひとつをとりあげてみても、普通に募集するのではなく、対象を「男性」や「独居老人」、「子ども」や「障害者」に設定するだけで内容も準備も展開も大きく変わってくる。どこでも開催されていそうな「パソコン教室」も開催日を平日にするか土日にするか、時間帯を日中にするか夜にするかで参加者の層が大きく変わってくる。参加者の層が変われば自然に内容も変わってくるだろう。「インターネット」などは料理の仕方 で立派な「人権学習」の教材になるだろう。このように、「講座」というものは条件次第で揺れ動く生き物なのだ。

8 評価

人権問題を真正面から取り上げるときには、まず「人をたくさん集めなければ」とは考えないことである。なぜなら、そういう講座に人が群がるような世の中ならそんな講座は必要ないからである。

にもかかわらず、社会教育の評価は往々にして目に見える量（参加あるいは応募人数）によってなされる面がある。

だが、長く現場で仕事をしてきた者からいうと、こんなおかしなものはないのだ。ずっと以前からそんな評

価の仕方はおかしいと思っていた私は、最近、逆転の発想をするようにしている。

たとえばAさんが人口一〇万人の自治体の公民館職員であると仮定しよう。Aさんの企画した人権講座には定員二〇人のところに一〇人しか集まらなかったとしよう。一方、最近流行の題材を取り上げ、大衆受けを狙って企画したBさんの講座には定員二〇人のところに一〇〇人も応募があった。さあ、これをどう評価しよう。部外者から見れば、今流行の「費用対効果」という観点からBさんの方が大成功を収めたように見えるのだろうか。

私のいう逆転の発想とはこうである。たしかに両者の応募者数には一〇倍の量的な差がある（ように見える）。だが、Aさんの講座もBさんの講座も関係のない人（公的サービスの埒外にいる人）の数は九万九千九百〇人と（一〇〇人全員を受け入れたとしても）九万九千九百〇〇人で、そこにはたいした差はないのだ。

もとより、一社会教育施設が一〇万人のすべてにサービスを提供することなど不可能だ。だとすれば、税を消費してBさんの講座を無料あるいはきわめて廉価で受講した人が自らの教養や技能を修得するだけで終わってしまうのがいいのか、あるいはじっくり人権学習をした一

〇人が、それぞれの地域で種を撒き、たとえ三人でも五人でも仲間を増やし、行動するようになるのがいいのか、答えは明らかだ。後者の方がよほどまちは活気づくようになるだろう。

「リーダーを育てる」ということを、私も含めて社会教育関係者は深く考えることもなくよくいうのだが、考えてみれば不遜ない方ではないかと考えるようになった。「育てる」のではなく、「自ら」育つきっかけを提供する」程度の表現の方が正確なのかもしれない。連続講座で「現代的課題」を取り上げることの意味はそこにこそあるのだと思う。つまり、「種を撒く」ことのできる人材がいかに育つかというところに評価の重点がなければならぬだろう。

「行政評価」なることばがはやってる。たしかに必要なのだろう。だが、社会教育の評価においては、質を評価するということを念頭に置いて、慎重であつてほしい。

五 「女性学」への出合い

先には「自分なりのこだわりを大切に、その視点から事業を展開するのも有効な方法であろう」と書い

た。その私の「こだわり」となったのが「女性学」であった。きっかけは単純なことで、いつものように「次はなにをテーマにとりあげよう」と考えていて、たまたま思いついたのが「女性問題」であったにすぎなかった。

女性学講座（PARTⅢ）「やがてあなたもおばあちゃん」を実施する二年前、一九九四年に出会ったのが「女性学研究者」という、それまで聞いたこともない肩書きを持つMさんであった。こうして、富田林市立中央公民館がはじめて「女性学講座」を開催したのは一九九五年春のことである。それが「女性学」ということは富田林で公的に紹介した最初ではなかったかと思う。もちろん私自身も講師の肩書きを通してはじめて知ったことばだった。

Mさんを講師として実施した「女性学講座」「人間関係論序説―女の生き方を考える」は、

―「キーワードは《女》と《人間関係》。『女と男』『親と子』『嫁と姑』などの諸関係と『戦争』や『家制度』を横軸に、『古代』から『現代』までの歴史を縦軸に、女性の位置や生き方を通して『現代』を考える」―

という呼びかけで、次のような一〇回になった。

- ① 人間関係論―総論・《人間関係》とは何か
② 歴史の中の女―1―古代・中世における《女》

- ③ 歴史の中の女―2―近世の身分関係と《人間関係》
④ 歴史の中の女―3―近代―1 家・社会・国家における《女》と《人間関係》

- ⑤ 歴史の中の女―4―近代―2 戦争をとおしてみる《女》と《人間関係》

- ⑥ 現代の中の女―1―「性」をとおしてみる《人間関係》

- ⑦ 歴史の中の女―2―「女と男」「妻と夫」など「男女関係」にみる《人間関係》

- ⑧ 宗教の中の女―1―宗教における「穢れ」思想と《女》

- ⑨ 宗教の中の女―2―制度や形式・「冠婚葬祭」と「世間」と《女》

- ⑩ まとめ―《人間関係》をとおして「現代」を斬る

Mさんの講義はもちろん受講生には大好評であったのだが、同時に、女性が語る女性問題に、はじめてにふれて、一〇回を通して針のムシロに座り続けた私に与えた衝撃もきわめて大きかった。それは、一口でいうなら「目から鱗が落ちた」ということであり、二口でいえば「従来のものの方や考え方に、まったく未知だったフェミニズムという新しい視点を与えられた」ということである。こうして、「女性学」というのは社会教育でとりあげるテーマとして、今という時代にきわめてふさわ

しい「現代的課題」であると確信することになった。「女性学講座を今回限りではなく継続して深めていこう」と決めたのはこういう事情による。こうして、「女性学講座」は見事に私のこだわりになってしまった。

以来、もちろん「一人の講師で全一〇回」という手法にこだわって二〇〇四年のPARTIXまで続けることになった。

一九九五年当時の私には「女性学講座」が二一世紀にまで継続し、さらにそれが市の女性施策や市民の学習活動と連動して、『富田林・発：ジェンダーエッセイ集』に載める女 つぶやく男』（文部科学省の委嘱を受けジェンダーに関するエッセイを全国規模で募集し、冊子にまとめたもの）や『金香百合のジェンダーワークシヨップ』（「女性学講座」PARTIXの記録）という具体的な形（出版物）をもった成果を生み出すことになるとは想像すらできなかつたことである。

ここにも「同一講師による連続講座」の「継続性」の可能性が見られる。

六 おわりに

たとえば、行政内で「社会教育課」が、実態はなにも

変わることもなく、名称だけが「生涯学習課」に変更されるという事態が、まるで流行病のように相次いでいるように、「社会教育」という概念が、わけもわからぬまま「生涯学習」なる概念に飲み込まれようとする時代であるからこそ、私見ではあるが、あえて両者を差別化するためという。私は、「社会教育」というのは、「生涯学習」と同じように「税」を消費して営まれる公の教育活動であると考えている。

「税」を消費して営まれる教育活動であるかぎり、人びとが住みやすい社会の実現（まちづくり）に多少なりとも貢献するものでなければならぬ。そして、その基盤に「人権尊重」という理念が根づいていなければならぬ。ないことはいくらでもない。

だとすれば、社会教育を担う者（社会教育主事など）に求められる、もっとも大切な資質も見えてくる。では、その資質とはなにか。

それは「想像力」であると私は思っている。

なぜなら、「人権尊重」という理念にもとづいて、「現代的課題」にとりくむ社会教育が、さまざまな生活課題や悩み、苦しみをいっばいに抱えながら、声を上げることのできない（あるいは機会を与えられていない）生活者

をこそ対象にするべきであるということが承認されるのであれば、そんな人びとの「声なき声」に耳を傾けて聴き、真のニーズに可能な限り近づくためには、「想像力」を駆使するしか方法はないからである。

では、私にとって社会教育とはどのようなものか。端的にいうなら「世間に波風を立てる、きわめて刺激的な教育活動」である。ここでいう「世間」とは、いわゆる「世間」であるとともに、その「世間」にどっぷり浸かりきっている人間の内面をも指す。先に紹介した、「女性学講座」から『めざめる女 つぶやく男』へ、さらに、それ以後に至る一連の活動（関連文献参照）もその好例のひとつに数えられるであろう。

関連文献

今西幸蔵・村井茂編著『現代における社会教育の課題』八千代出版、二〇〇六年四月。

上杉孝實監修、部落解放・人権研究所編『成人教育ハンドブック 生きた学びを創る―人権時代をひらく地域成人教育』解放出版社、二〇〇一年二月。

浮穴正博「生き方を問う学びの発信―富田林・発…ジェンダーエッセイ集『めざめる女 つぶやく男』をめぐって」(『ビューマンライツ』一七二号、二〇〇二年七月)。

金香百合・浮穴正博監修／ジェンダー・学び・プロジェクト編『金香百合のジェンダーワークシヨップ』解放出版社、二〇〇五年三月。

ジェンダー・学び・プロジェクト編『富田林・発…ジェンダーエッセイ集『めざめる女 つぶやく男』』解放出版社、二〇〇三年七月。

ジェンダー・学び・プロジェクト編『ジェンダーの視点から社会を見る―出会い 気づき つながりへ』解放出版社、二〇〇六年一月。

『ビューマンライツ』一九八号(特集…ジェンダーエッセイ『めざめる女 つぶやく男』Ⅱ)二〇〇四年九月。